HOKKESHU SHINPOH

法華宗信報

[札幌市　北海道大学農学部植物園・博物館]
1882(明治15)年に開拓使の札幌博物場として建てられた博物館で、現役の博物館建築としては日本最古のものです。アメリカ人建築士ベートマンの設計に基づいたもので、教会のような外観ですが、博物館として設計されており、1階から2階へと回廊をめぐるようにして展示を見ることができる構造になっています(2階は現在非公開)。

令和元年テーマ

えにし つよく

- ご挨拶／大本山本能寺 桃井日英猊下
- 北海道の御会式
- 寺院の歴史／釧路市 本祥寺
- コラム／私の住職日記
- 連　載／編集員のおすすめ
  北海道の観光スポット ～知床～

160

令和元年10月1日
発行　法華宗宗務院

宗祖日蓮大聖人御会式

ご挨拶

大本山本能寺　桃井日英猊下

秋の彼岸も過ぎて、深まりつつある秋を感じながらお迎えする十月十三日は日蓮大聖人の御命日です。この御命日に奉修されますのが『御会式』法要です。弘安五年（一二八二）の十月十三日に世寿六十一歳をもって入滅された日蓮大聖人は本年で七百三十八回目の御命日をお迎えになられます。また、来る令和三年にお迎えする宗祖日蓮大聖人御生誕八百年の聖年とともに我々法華宗の信徒にとって大切な法要です。

宗祖は御生誕以来、忍難弘通の御生涯におかれ本門八品の御題目を唱えられて大衆に慈悲の心をお示しになられました。この御恩に報い感謝して御題目をお唱えし、お勤めする法要です。

宗祖は『立正安国論』において

「汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり。仏国それ衰えんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微なく、土に破壊無くんば、身はこれ安全にして、心はこれ禅定ならん。この詞この言、信ずべく崇むべし。」と時の幕府に進言されましたが、これは聞き入れられることなく、そ

の為に法難を受けられることとなりました。

平成から令和に移り半年もたたないうちに凄惨な事件が数多く起こっております。押し流される世の中に人々の心の禅定はどこに行ってしまったのでしょうか。『立正安国論』は当時の世相を観られた宗祖の御言葉ですが、七百六十年経つ今日、令和の時代にこそ、改めて宗祖の御言葉を鑑みる必要があるのです。

「この詞この言、信ずべく崇むべし」とありますように生きとし生けるさまざまなもの、国土の恵み、御先祖さまから授かった恵み、法華経に巡り合わせてくださった喜びを宗祖日蓮大聖人の御命日に報恩感謝の気持ちを込めて、御題目をお唱えいたしましょう。

合掌

北海道の御会式

平成から令和へと元号が改められ盂蘭盆会・秋季彼岸会と季節が変わり、十月は御会式法要を大本山始め全国各寺院で厳修されます。御会式は日蓮大聖人の一二八二年（弘安五年）十月十三日御入滅に際し法要を執り行う事で、地域によって「報恩講」や「報恩大会」とされております。北海道では十月～十一月と二ヶ月間にわたり組寺・法類・近隣寺院協力のもと、道内各地を周り厳修いたします。

北海道では前日夕刻の御逮夜法要、当日の御正当法要を行います。現在では車での移動が可能ですが、過去には汽車や馬を乗り継いで道内各寺院へ参集しておりました。

夕刻の御逮夜法要終了後は僧侶や檀信徒が寺院にて宿泊をし、共に食事をして交流を深めていた時代がありました。

又、御正当法要終了後は次の寺院へ移動し御逮夜法要を行うという連日移動と法要を繰り返すため、臨席僧侶は各寺院を留守になってしまいますが、坊守や檀信徒の護寺意識が高く、数日不在でも安心して法要に臨めるのです。

信仰篤い方々は僧侶と共に各寺院へ参詣される事もありました。そのため、他寺院との繋がりが出来て布教活動としての一面も担う法要なのであります。

法要式の特色としては、差定（式次第）が各寺院で異なり日蓮大聖人御一代記の和讃を取り入れる寺院もあります。又、僧侶のみですが焼香所作が異なり、通常は御宝前に向かい右側から入り左側へ抜けるのですが、北海道では左右の僧侶が一名ずつ御宝前に進み同時に焼香をする「対面焼香」（体面焼香）という所作を行います。

北海道は異文化が混在し変動・発展をして各

地域に根付いております。それらは御会式のお斎供養にも表れており、斜里町本行寺では「でんぷん団子」、新ひだか町静内久遠寺では「はちはい汁」など地域の特産を活かした料理が列び、食すことで御会式に参加したと感じる方もいらっしゃるようです。

御会式法要を厳修するにあたり、二日～四日ほどの準備期間を設けますが、現在では檀信徒の高齢化に伴い、北海道でも御正当法要のみ執り行う寺院が増えてまいりました。法要に参加することの他にも準備等のお手伝いも報恩感謝の体現です。

本年は日蓮大聖人が御入滅されて七三八遠忌を迎えます。報恩感謝を持って寺院参詣をし、一同声を揃えてお題目を唱えましょう。

北海道寺院で振る舞われるお斎供養の一例

日高郡新ひだか町　久遠寺

『はちはい汁』

久遠寺では、はちはい汁を3月の日隆聖人御正當法要、11月の日蓮聖人御会式法要にて、当番のお檀家さんが調理し、参詣された方に振る舞います。明治時代に、淡路島から宗教移住し開拓した時代から続いていると言われています。

材料は、人参、ゴボウ、椎茸、筍（北海道の笹筍）、フキ、かんぴょう、豆腐など。材料を出汁で煮て、醤油等で味付けして、片栗粉でとろみを付け完成です。優しい素朴な味ですが、何杯もおかわりする方もいらっしゃいます。久遠寺では当番の班が違うと味付けや材料も代わり、毎年出仕されたお寺さんや参詣された檀信徒の方々が楽しみにしています。数十年前までは、豆腐も手作りで用意していたそうです。

斜里郡斜里町　本行寺

『お会式　でんぷん団子』

二十数年前にご供養の煮豆が予定よりも多く残ったことがきっかけであり、でんぷん団子作りが得意なお檀家さんが、「斜里の特産物だし、初めて食べる方は喜んでくださるかもしれない。」ということでご供養したところ、ご臨席の組寺のご住職がとても喜んでくださったのでそれから毎年の恒例になっています。

でんぷん団子

はちはい汁

寺院の歴史

北海道の開拓が本格的であった大正時代、檀信徒は開拓に励み、僧侶は新しい土地での布教に寺院の創立に勤しんでいた。

今回は「釧路市　本祥寺」をご紹介致します。

釧路市

釧路市は北海道の東側、いわゆる道東と呼ばれる場所に位置しており、釧路湿原国立公園と阿寒摩周国立公園の二つの国立公園を有する、豊かな自然に囲まれた都市である。真夏の暑い時期でも最高気温が三十度を超える事が少なく、北海道の中でも涼しい街の一つとして、最近では観光地というだけでなく、夏の避暑地としても賑わう街である。

釧路の漁業

江戸時代以前、今の釧路周辺では昆布やサケ漁が行われてはいたが本格的に漁業が盛んになったのは、本州からの移住者が増えた明治時代になってからである。その後、大正、昭和と漁業はさらに発展し、昭和四十年代から平成初期にかけては、北洋漁業やイワシ漁を中心に水揚げ量全国日本一を通算二十回以上も記録するなど、釧路の発展に大きく貢献した。現在でも釧路は日本有数の漁港の一つに数えられている。

本祥寺の成り立ち

本祥寺の始まりは大正時代に遡る。

その当時、後の本祥寺開基住職、皆川海眞上人は釧路町知人（現在の釧路市知人）に住む法華宗の行者であった。明治時代中期から開拓の進み始めた釧路町や鳥取町（現在の釧路市鳥取大通周辺）近辺において布教活動に邁進していたところ、鳥取町に住んでいた高岡善吉氏が説教所を漢望しそれを開設すべく用地を借り受けて、草わら小屋を建て、大正三年三月に「法華宗布教所」を開設する。

大正六年、釧路周辺を流れる阿寒川切替工事が終わり、北海道興業が鳥取地区に製紙工場（現在の日本製紙（株）釧路工場）の建設に着手した大正七年、鳥取市街地の現在地に布教所を移転し、改めて、「法華宗鳥取教会」を開設する。

昭和初期　本祥寺前身　鳥取教会

昭和41年　解体前の旧本堂、納骨堂、庫裡

その後、大正から昭和にかけて教会は第二世武内俊亮上人、第三世三好敬誠上人へと継承される。昭和十二年、第四世として派遣された行天祥龍上人は教会発展の為に身を委ねるが、昭和十九年九月、三十六歳の若さで病気のため遷化される。

当時は終戦前年にあたって戦争が激化の一途を辿っており、住職の補充はとても困難な状態でしばらく無住の状態が続いていたが、昭和二十二年六月、大本山本興寺より第五世大山俊海（日辰）上人が赴任する。日辰上人は倶知安町本因寺第六世渡辺日晴上人に師事し、二十歳で出家得度する。その後、虻田郡豊浦町感応寺、津別妙法寺を経て鳥取教会に着任したのは三十一歳の時であった。この頃の教会の信徒は僅かばかりであり、毎日のように托鉢に出ては米や野菜の布施を得ての生活であった。しかし、すべては法の為と東奔西走の教化活動を展開する。

昭和二十五年二月、将来の寺門興隆を考えて寺号公称を決意し山号を東海山、寺号を現在の本祥寺と称す事とした。その後、次第に寺門は進展していく事となる。昭和三十八年、老朽化した本堂、納骨堂、庫裡の新築を発願して、日辰上人・檀信徒異体同心となっての大浄業が、仏祖三宝諸尊に導かれて成満する。

現在　本祥寺　本堂

昭和四十二年十月二十一日に本堂・納骨堂落慶法要を厳修する。昭和五十二年に庫裡、納骨堂増築、会館改築。昭和五十四年十月二十一日、宗祖日蓮大聖人第七百遠忌大法要を大本山本興寺貫首小西日静猊下御親修のもと、副導師本因寺渡辺日晴上人、本山塔頭木村日應上人、組寺法縁各上人を迎えての御報恩謝徳の大法要を厳修する。

昭和41年　上棟式　総代役員、婦人部

日辰上人は在職三十七年もの間、教化活動に精進せられ本祥寺隆昌の礎を築かれたが、昭和五十九年一月に六十九歳で惜しまれつつ遷化される。同年四月に第六世として大山俊行上人（現住職）が法灯を継承する。

日辰上人の意志を引き継いだ俊行上人は、日々の教化活動と共に檀信徒とさらなる寺門発展に尽力され、昭和六十二年、本堂、納骨堂、会館、庫裡の屋根及び外壁の改修工事を行う。平成五年八月、開創八十周年記念法要を奉修する。他にも開基皆川上人墓碑の改修、記念誌の発行等、俊行上人と檀信徒がまさに寺檀一丸となって、本祥寺の護寺興隆に邁進されて今日に至る。

釧路開拓とともに二から始まった本祥寺の発展は、幾多の苦難を乗り越えてきた先上人・檀信徒の篤き信仰と絶えまぬ努力が共にあった事は言うまでもない。

昭和54年　宗祖日蓮大聖人第七百遠忌法要

編集員のおすすめ

北海道の観光スポット

当編集員が北海道各地のおすすめスポットを独断と偏見を交えて紹介します。

斜里町　知床五湖の風景

世界遺産「知床五湖」

知床五湖は知床半島の斜里町にある世界遺産（自然遺産）にも登録されている五つの湖です。それぞれの湖に個別の名称はなく便宜的に「一湖」から「五湖」と呼ばれています。大自然に囲まれ、周りの樹林や知床連山を湖面に写しながら静寂を保っているその姿は、まさに原始の中の楽園にふさわしく、多くの植物だけではなく、活動期にはエゾシカやヒグマといった動物たちを目にすることができます。

散策路には、無料で利用できる高架木道と予約が必要ですが、登録引率者さんによるガイドツアーが楽しめる地上遊歩道の二つがあります。

高架木道からは一湖が一望できる展望台があるほか、背景には美しい知床連山を眺めることができます。木道なので歩きやすく、ヒグマ対策もとられているため、シーズンを通して安全に自然を感じることができます。

地上遊歩道には、一湖から二湖までの小ループと五湖を全周する大ループがあり、時期によって利用条件が変わり、ヒグマの出没時には閉鎖されることがあります。小ループは閉鎖されることも少なく、クマよけの鈴も貸し出しされているため、安心して散策できます。それぞれの湖から見る風景はとても美しく、大自然を満喫するには絶好の場所です。

湖から知床連山を眺める

「私の住職日記」第8回

「あの人のおかげ」　苫小牧妙見寺住職　末澤隆信

妙見寺では二ヶ月に一度、読書会を開き、参加者が作品について語り合っている。その日は芥川龍之介の「蜜柑（みかん）」という小説を取り上げた。毎回、住職手作りのスイーツを提供しており、その日ふるまったのは「みかんのババロア」

…大正時代、日々の勤めに疲れ切り、世の中を低俗としか思えぬ主人公の「私」。ある日、仕事帰りの列車の真向かいにずかずか座り込んできた田舎娘。断りもせず客車の窓を開けたから、蒸気機関車の煙が入ってきて迷惑千万。その無遠慮さに「私」は「この娘こそ世間の下等な人生の象徴」と軽蔑する。列車が踏切に差し掛かる頃、娘は風呂敷の中から鮮やかな蜜柑を掴み取り、窓から身を乗り出し外に投げ込んだ。その下に待っていたのは三人の男の子。夕暮れの空に五つ六つ降りていく黄色い蜜柑。それは奉公先に旅立つ彼女が、手を振って見送る弟達へ向けた純朴な愛情のしるしだった。それを見た「私」から娘への蔑みの心は消え、朗らかな気持ちが生まれていた…

「同じ様な記憶があります」と、読書会に参加した七十代の男性が語り始めた。「終戦後間もない頃、子どもだった私は、北見から室蘭まで家族と一緒に機関車で移動しました。あの頃の鉄道はとても混雑していて、窓から荷物を出し入れする程でした。満員でむせかえった客車の中、私は喉がひどく渇いてしょうがなかった。その時でした。見知らぬ人が大きな梨を一つ、差し出してくれたのです。無心でかぶりついた、その梨のみずみずしさ、美味さが今も心に残っています。あの梨のおかげで私は生き延びられた。食料難で、みんな自分の事だけで精一杯だったあの時代。あの人の心の温かさが今いっそう身に沁みるのです」

聞く人みんなの心を打つ話だった。「あの人のおかげ」そんなことを皆で思い出し、話し合う場所にお寺がなれたことをうれしく思った。

編集後記

皆様「イランカラプテ」（こんにちは）

令和初めての北海道の夏は本州より気温が高くなる等のまさに異常気象が多発しておりました。また、異常ともいえるのが札幌市等の都市部でのヒグマの出没です。北海道の都市部が大自然と隣接してるとはいえ、近年では珍しいほど住宅地で目撃されております。

この事で思い出したのが、アイヌ民族のお話にご先祖様が熊（キムンカムイ）を被り、この世の人に狩られ食べられに来るというのです。そして、この世のアイヌの人々によって、あの世に送り返されるのです。この祭式儀礼を「イオマンテ（イヨマンテ）」といい、アイヌ民族の儀式として大変重要な位置にあったとされます。

昨今の異常気象等で野山の木の実、果実が激減してると聞きます。ヒグマも生きていく上で危険をおかしながら、都市部へ出てくるのです。

私達人間は知恵知識があるわけで、様々な野生動物との共存を先人の知恵を拝借し、そこに感謝しながら、良い共存の道を見つけていけると考えております。

法華宗信報
NO.160
令和元年10月1日発行　発行人／二瓶海照　編集人／千葉啓佑
編集部／〒078-0349 北海道上川郡比布町寿町1-2-8 本宣寺内　TEL.0166-85-2657
発行所／〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1 法華宗宗務院　TEL.03-5614-3055
http://www.hokkeshu.or.jp/
レイアウト・印刷／有限会社フロムサーティーフォー　表紙イラスト／イイダナオミ